

## 声高らかに主を迎えよ

### ルカによる福音書 19章28節～44節

19:28イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。 19:29そして、「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもとにあるベトファゲとベタニアに近づいたとき、二人の弟子を遣いに出そうとして、 19:30言われた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。 19:31もし、だれかが、『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」 19:32遣いに出された者たちが出かけて行くと、言われたとおりであった。 19:33ろばの子をほどいていると、その持ち主たちが、「なぜ、子ろばをほどくのか」と言った。 19:34二人は、「主がお入り用なのです」と言った。 19:35そして、子ろばをイエスのところに引いて来て、その上に自分の服をかけ、イエスをお乗せした。 19:36イエスが進んで行かれると、人々は自分の服を道に敷いた。 19:37イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかられたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。

19:38「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光。」

19:39すると、ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、「先生、お弟子たちを叱ってください」と言った。 19:40イエスはお答えになった。「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫び出す。」 19:41エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、 19:42言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。 19:43やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、 19:44お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

まもなく震災後5年がたちます。このごろ私は、いつのまにか、以前の出来事の時期を「あれはいつだったか」と思い出そうとするときに、「震災前」か「震災後」で考えるよ

うになっています。震災はそれほどに時代を画する出来事でした。実は、当時のユダヤ人にとっても、時代を画する歴史的な大事件がありました。それは西暦70年のユダヤ戦争です。

この戦争の後、ユダヤ人は国土を失ったのです。当時のローマ総督が、ローマの植民地だったエルサレムのインフラ整備の資金源として、神殿の宝物に手をつけたことに逆上した過激派の暴動に端を発して、ユダヤとローマの間に4年間にわたる戦争が起こりました。これについては、当時、ヨセフスという人が「ユダヤ戦記」という書物を書きました。これによれば、ユダヤは初め優勢でしたが、瞬く間にエルサレムはローマに包囲され、兵糧攻めに会います。ローマの戦略として、(当時も巡礼地として有名でしたから)巡礼者のエルサレム入りは許可しましたが、そこから出ることは赦しませんでした。その結果、人口が急増し、食糧難となり餓死者も出たのですが、ユダヤ側は和平交渉に応じませんでした。ユダヤ人は秘密の地下トンネルを持っていたので、エルサレムは簡単には攻略されなかったのです。またローマも美しい都を保存したいと考えていましたので、あまり無茶な攻撃もできなかったのです。ところが命令違反でローマ兵がたいまつをばら撒いたために、大火事になり、無秩序な大虐殺が起こり、エルサレムは死体だけの無人の廃墟となりました。焼け残った神殿などの建造物は使い物にならず、結局ローマの司令官は解体を命ずる他なかったということです。今日でも、解体された城壁の石が散乱している場所が残っているようです。この戦争によって100万人以上が死に、10万人近くが奴隷にされ、持ち主のいない財宝はローマに運び込まれました。その時の様子を描いたレリーフが週報の表紙に載っています。



当然、キリスト教会にもこの戦争は衝撃だったはずですが。そしてイエス様の預言を思い出すことになり、記録されました。福音書にはユダヤ戦争を念頭に置いて書かれたと思われる記述が至るところにちりばめられています。たとえば13章の31節以下、ここには「見よ、お前たちの家は見捨てられる。」というイエス様の嘆きが記されています。21

章の5節6節も神殿の崩壊がほのめかされ、21章の20節以下では、直接兵糧攻めのこと書かれています。先にも申しましたように、「ユダヤ戦記」によれば、誰も、ユダヤ人だけでなくローマ兵ですら、そこまでエルサレム神殿が徹底的に破壊されるとは思っていませんでした。イエスは“石が残らず崩される”と、徹底的崩壊を預言しましたが（19：43-44；21：5-6）、それは人の業によらない、誰も計画したり予見したりできない、まさに神の業でした。

ところで、前回、19章11節からのムナの警への説教をしたとき、27節で「あの敵どもを、ここに引き出して、私の目の前で、打ち殺せ。」と王が言ったということについて、つまりキリストが再臨したときに言う言葉、これがあまりに残酷なので、皆さん衝撃を受けました。実はこれも、ユダヤ戦争が背景にあるからなのです。聖書の信仰は、ナイーブな楽観主義ではありません。過酷な現実を生き抜く信仰です。ある著名な心理学者が、トラウマを受けたPTSDの患者は異常なのではなく、むしろ彼ら彼女らは世界の現実に目覚めた人々であって、世界の現実を知らない楽観的な一般人の方が異常なのだ。病気は新しく知った世界の現実を生きて生けるようになるためのプロセス、準備期間であり、PTSDから回復した人々は、元に戻ったのではなく、過酷な世界の現実と折り合いをつけて生き抜くことができるようになった崇高な人々、新しい人類なのだというようなことを言っています。キリスト教徒になった人々も、現実の過酷さを知りつつ希望と愛に生きることを学んだ人々でした。キリスト者にとって西暦70年の戦慄すべき戦争体験は、平和の王イエスを否定した人々に対して起こるべきこととしてイエスが涙ながらに預言した言葉の成就でした。そしてそれは最後の審判ではないものの、主が一方的に主導権をとられる罪の赦しの業に頼ることなしには免れることのできない最後の審判のより過酷であることを明記させる出来事だったのです。そして、主の業を無視して己の業で生きようとする者の運命を、「あの敵どもを、ここに引き出して、私の目の前で、打ち殺せ。」という神の裁きとして心に刻むことになったのです。

あのユダヤ戦争というトラウマ体験を超えさせ、最後の審判をも耐えうる信仰とは何でしょうか。つまり42節にあるように、当時のユダヤ人がわきまえることのできなかつた「平和の道」とは、どのようなものなのでしょう。これが今日の箇所、19章28節以下の主題です。この信仰の道、平和の道には、3つのこと、つまり主の業、人間の従順、人間の反逆・・・この三つのことが語られています。

第一は、主の業です。主が行動される。主が主導権をとられる、ということです。28節から36節までは、主語はすべてイエスです。「イエスは・・・先に立って進み」ま

す。「二人の弟子を使いに出す」のもイエスです。遣わされた弟子たちが体験することもすべてイエスが予知したことです。ロバの子がどのような状態にいるかということも、そのロバの子を連れてこようとすると、誰に何と言われるかも、そう言われたらどう受け答えすべきかということも、具体的にイエスが教えます。イエスが教えたように、事が起こり、「主がお入用なのです」という教えられたとおりの一言で、持ち主はロバの子を渡してくれます。これは弟子たちにとって驚きであり奇跡でした。

そしてこれらのイエス主導の行動は、ゼカリヤ書9章9節の預言の成就です。読んでみましょう。

09:09娘シオンよ、大いに踊れ。

娘エルサレムよ、歡呼の声をあげよ。

見よ、あなたの王が来る。

彼は神に従い、勝利を与えられた者

高ぶることなく、ろばに乗って来る

雌ろばの子であるろばに乗って。

09:10わたしはエフライムから戦車を

エルサレムから軍馬を絶つ。

戦いの弓は絶たれ

諸国の民に平和が告げられる。

彼の支配は海から海へ

大河から地の果てにまで及ぶ。

救い主のもたらす勝利と平和は、ユダヤ戦争の勝利と平和とは全く違います。それは「高ぶることのない」王です。それは軍馬にまたがる凱旋将軍ではなく、まだ力が十分ない子ロバにそっと静かに乗る王です。ロバに乗って即位する王のイメージというのは、旧約聖書の伝統の中にあり、ダビデの子らのうち力のある子らではなく、弱い立場のソロモンが、大方の期待と予想に反して、神の摂理によって即位したときに、らばに乗ってきたと書かれています。聖書の伝統では、ロバのイメージは、弱さ・謙虚さと、神の主導権とが結びついています。

平和の道の第二は、人間の従順です。これは今述べた弱さ・謙虚さに留まりつつ、主に従順に従うということです。私たちは平和の道を知らないのです。そのことを謙虚に表明

し、主の指示に従うのです。弟子たちはそのようにしました。言われたことをするだけです。主体性もへったくれもありません。「神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる。」(マタイ4:4) これです。ここで弟子たちは自分の服をイエスの歩まれる先の道に敷くという行為をいたします。これも旧約聖書の伝統にある従順の表現で、バアル宗教という人身御供をしていた農耕宗教を排除するためにイエフという兵士が神に選ばれたとき、他の兵士がただ神のご意志だという理由だけで、ためらうことなく自分の上着をイエフの足元に敷いて、即席の即位式を行ったという故事に倣うものです。

奇跡とは、ありえないことが起こることです。神の業は、ありえることを通してもなされますが、ありえないこともなさいます。ありえることの中だけで生活していると、神様のことがそっちのけになってしまいます。ありえないことは、神様の手が及んでいることを私たちに垣間見せてくれます。弟子たちは、今起こった奇跡だけでなくこれまでの幾つものイエスの奇跡を思い、神様の介入を見たのでした。冷たい法則が支配しているのではなく、神のみ手がすべてを支配し私を導いていてくださる。だからすべてを主に委ねよう。この信仰から生まれる私たちの行為は、ただ賛美あるのみです。弟子たちは「声高らかに」歌った、とあります。それは詩編118篇26節の歌です。「主の名によって来られる方、王に、祝福あれ。」私ではなく、主に祝福あれ。弱さのままで、謙虚に、イエフの兵士たちのように従順に、自分を無にして、主が進み行かれることを喜ぶのです。それはクリスマスの夜、羊飼いたちが聞いた歌に似ています。天には栄光、地に平和。でも地に平和はまだ来ていません。

だから、まだ平和は天に留まっています。そこから王は、平和を引っさげてやってこられる。すべてを主に任せ、私たちは安らぐことができます。これが私たちのわきまえるべき平和の道です。

平和の道について、第三のことが語られます。それは人間の反逆です。ファリサイ派の指導者たちは、ただ主に任せているだけでは、飽き足りないものを感じたのです。無学で教養もなく弱い蔑まれた階級の弟子たちは、もっと強く立派なるように戒められなければならなかった。神殿で専門家による厳かな賛美こと為すべきであって、あんな恥ずかしい行列で、神聖な歌を大声でがなり立てられるのは我慢ならなかったのです。彼らは上品にイエスに進言します。「先生、お弟子たちを叱ってください。」彼らは、自分たちのやり方で平和を築こうとしたのです。

それに対するイエスの答えは、「この人たちが黙れば、石が叫びだす。」神への賛美、自分を無にする信仰はとどめ置かれるべきではない。それは平和の道ではない。けれども、

イエスは知っておられました。弟子たちが黙らせられるときが来ることを。そして石が叫び出すときが来ることを。エルサレムの崩壊です。子どもが地にたたきつけて殺され、「一つの石も崩されずに他の石の上に残ることがない日が来る」のです。西暦70年、エルサレムは、ローマ軍によるというよりも、予期せぬ大火で壊滅しました。

神様は悪と善が入り混じったような中途半端はお許しになりません。ヘブライ人は、アブラハムの子孫は、神に一点の悪のしみをつけることもしませんでした。それは地上の歴史上のどの宗教にも見られない特徴です。神様は人間の罪とどこかで歩調を合わせることはなさいません。人間のやり方を壊滅されるのです。主はそれを西暦70年に為されました。それがキリスト教徒が見た、ユダヤ戦争です。

けれども主は、それに先立って、主と共に歩む人々を、真実に平和の道を歩む人々を備えられました。彼ら彼女らは、罪を赦されて歩む人々です。頼るものは主のみ、という人々です。「主の名によって来られる方に、祝福があるように。」(13:35)と、再び歌いだす人々です。主が来られることにのみ、その主をお迎えすることにのみ希望を持つ人々です。主はすべてを滅ぼす前に、この人々を創造されました。それが教会です。その教会を作るために、主は十字架にお架かりになりました。教会は、自分が何事かを為すことに絶望した者であり、「声高らかに」主を迎えつつ歩むことにのみ希望を持つ信仰者の集まりです。「声高らかに主を迎えよ。」これが今週一週間を生きるために私たちに与えられたみ言葉です。